

# 反宗教的ヒューマニズム宣言

民主的かつ反宗教的なヒューマニズム協議会1980年宣言

ポール・クルツ (大塚 稔訳)

## A Secular Humanism Declaration

Paul Kurtz (drafted)

### 序 文

反宗教的ヒューマニズムは現代世界になくなくてはならない力である。現在これは、様々な立場の人々から不本意にも過度の攻撃を受けている。この宣言は、反宗教的ヒューマニズムの立場だけを擁護するが、これこそが民主主義の核心だと考えるためである。超自然的な価値を容認するすべての信念、あるいは絶対的な権力者による支配を是認するあらゆる信念に反対する。

民主的かつ反宗教的なヒューマニズムは、世界の文化に圧倒的な影響力を持ってきた。この理念は、哲学者や科学者たち、ギリシャおよびローマの詩人たち、古代中国の孔子の時代、インドの自由主義思想家たちの運動<Carvaka movement>、およびその他の知的かつ道徳的な種々の伝統にまで辿ることができる。反宗教主義とヒューマニズムは、宗教的敬虔さが人間の諸問題を自分たちの力で解決しようとする自信を破壊してしまった中世の暗黒時代には衰退したが、文学や芸術の世界の反宗教的なヒューマニストたちの価値が再確認されるにつれて勢いを増し、16世紀と17世紀に科学と自然主義的観点が発展することによって更に押し進められた。その影響は、18世紀の理性の時代および啓蒙主義の時代にも見ることができる。

民主的かつ反宗教的なヒューマニズムは、自由と民主主義が成長した現代という時代に創造的な花を咲かせている。思慮深い数百万もの人々が反宗教的ヒューマニズムの理想を強く支持して有意義な人生を送ってきたし、更に人間的で民主的な世界を築くために貢献してきている。現代の反宗教的ヒューマニストの世界観が、結果として科学と科学技術を利用して人間の生存条件を改善することになった。このことによって、世界の様々な地域に見られる貧困、精神的肉体的苦痛、および疾病を減少させることに成功した。その結果、寿命は延び、交通手段やコミュニケーションも改善され、更に多くの人々の生活が快適なものになった。何百万もの人々が盲目的な信仰や迷信の恐怖から解放されたし、そういう人々の教育と生活の豊かさを向上させることにも貢献してきた。

反宗教的ヒューマニズムによって、人類は自らの知性と忍耐力でもって自分たちの問題を解き、地理的、社会的な制約を克服し、人間の探求と冒険との範囲を拡大する方向に進むことが可能になった。しかし残念なことに、我々は今日、反宗教的な立場に反対する様々の勢力に直面している。独断的な権威主義的宗教、つまり根本主義<fundamentalist>や字句拘泥主義<literalist>、自己正当化的キリスト教主義および中東やアジアで急速に勢力を増しつつある非妥協的なモスリム教の聖職主義が再び現れているし、またローマカトリックの教皇制度の職階性、国粹主義的な宗教であるユ

ダヤ主義およびアジアに見られる反啓蒙的な諸宗教の再興も叫ばれている。

不自然極まりない非科学的、魔術的な信仰心だけでなく非理性的な信仰心を持った新たなカルト集団、例えば占星術や輪廻転生思想、および霊の神秘的な力などが現在多くの西洋世界に瀰漫しつつある。これらが現在のように瀰漫してきた背景には、二十世紀初頭の狭隘なメシア待望論に基づく宗教運動や全体主義的な疑似宗教運動、つまりファシズムや共産主義の出現が大きく作用している。これらの宗教的な情熱を持った活動家たちは、現代世界に横行している大方のテロや暴動に責任があるだけでなく、世界の深刻な諸問題を解決する妨げにもなっている。

皮肉なことに、反宗教的なヒューマニズムを批判する者の中には、それを危険な哲学だと主張する者もいるし、個人の自由を侵害するという意味で「道徳的な退廃を生む」とする言う者もある。また民主主義の正当な手続きを擁護しているために「不当だ」と咎める者すらある。民主的かつ反宗教的なヒューマニズムを支持する者にとって、このような誤認と誤解に基づく告発は容認しがたい。我々の大半が共有している一連の原理の大筋をここで整理しておきたい。

反宗教的ヒューマニズムは教義でも信条でもない。多くの問題で反宗教的ヒューマニストたちには広範囲にわたって意見の相違が見られる。にもかかわらず、いくつかの主張についてはおおよそ見解は一致している。

## 1：自由な探求

民主的かつ反宗教的なヒューマニズムの第一の原理は、あくまで自由な探求にある。人間の精神を支配するいかなる専制政治にも敵対するし、自由な思想を束縛するような教会組織、政治組織、イデオロギー、社会組織にも反対する。過去において、これらの専制政治は、教会や国家を後ろ盾にして、宗教的偏執者の命令に力を与えようとしてきた。思想史の長い闘争の中で、公私にわたって種々の組織が形成され、自由な探求に検閲を加えようとしてきたし、正当教義を信仰や価値に押しつけ、異端を宣告し不信仰者を惨滅しようとしてきた。今日、自由な探求に対する戦いは新たな形態を取り始めた。特定の宗派の考え方が新しい神学となり、それが政党や政府に代表者を送り、反対意見を撲滅する状況になっている。自由な探求には当然のことながら、市民としての自由一出版の自由、意思伝達の自由、反対政党を組織する自由、ボランティアとして各種の団体に参加する自由、科学や哲学、芸術や文学、道徳や宗教上の自由を探求し、追求する自由一必要不可欠なものとして含まれている。自由な探求は、意見の相違に寛容であることを要求するし、たとえ個人がいかに時代にそぐわない考え方をその信条とするにせよ、社会的、法的な禁止や制裁による恐怖を与えることなく、それを表明する権利を尊重する。もっとも対立した意見に寛容であるといっても、それが社会的な吟味を受けないでいいというわけではない。自由な探求の信奉者は、対立する意見が自由に交換される場合に、真理はより発見されやすくなるということをその理念としている。大半の場合、意見の相互交換の過程が結果と同じように重要になる。これは、単に科学や日常生活だけに妥当するだけでなく、政治や経済、道徳や宗教にも妥当する。

## 2：政教分離

反宗教的ヒューマニストたちは、自由に対する独自の信念から、教会と国家との分離は当然の原則だが信じている。歴史の教訓を見れば明らかである。一つの宗教やイデオロギーが真実だと見なされ、それが国家において支配的な立場にあるようなところでは、少数者の意見は危機に晒される。多種多様な観点からなる開かれた民主主義社会では、あらゆる意見に発表の場が与えられる。特定の真理や敬神、徳や正義の概念を社会のすべてに否応なく押しつけるようないかなる試みも、自由な探求を侵害するものでしかない。牧師の権威によって、教区内の一部の見方—道徳的、哲学的、政治的、教育的ないし社会的などのような見方であれ—に法的な権限が与えられ、他の市民たちがそれに従わされるようなことがあってはならない。また税収がそのような一部の宗教団体に恩恵を与えるために、あるいは支援するために使われるべきでもない。個人やボランティア団体は、いかなる信念であれ、それを受け入れる自由、あるいは受け入れない自由を持っているし、どのような財源で信念を支えようと自由だが、自分たちの信仰に添わない宗教団体に税金を課されて寄進が強要されるようなことはあってはならない。同様に、教会の財産は国庫歳入によって共有されるべきであって、税金を免除されるべきではない。公の（政治上ないしは教育上の）機関で宗教上の誓いや祈りの言葉が強要されるのもまた、政教分離の原則を犯すものである。人格神を信じる宗教もそうでない宗教も、現在、注目を引こうと競い合っている。遺憾なことに、共産主義国家では国家権力が、反国家的、異端的な思想表明に寛容さを示さず、特定のイデオロギーを社会に押しつけている。現代社会にあってもなお政教分離の原則を犯すような社会があることは、これを見れば明らかである。

## 3：自由の理想

現代世界には一反宗教的であろうとなかろうと我々が情熱を傾けて反対すべき様々の全体主義が数多く存在する。民主的な反宗教主義者として、我々は自由の理想を一貫して擁護する。良心や信条の自由を抑圧する教会、政治、経済のそれぞれの利害からそれらを守るだけでなく、真の意味での政治上の自由、つまり多数原理に基づく民主的な決定と少数者の権利、並びに法の規則に対する敬意をどこまでも擁護する。またいかなる宗教支配からも、またいかなる国粋主義的な政治支配からも、自由を擁護し、生命、政治的自由、幸福の追求を保護する権利を含む基本的な人間の権利を擁護する。我々の観点では、自由な社会はまた、公共の利害に必要な制限には従うものの、ある程度の経済上の自由についてはこれを促進すべく努めねばならない。個人や団体は市場競争ができる状況にある必要がある。つまり自由貿易団体を組織することができ、中央の不当な政治圧力に干渉されずにその仕事や職務が遂行されねばならない。私有財産を持つ権利は正当であって、これがなければ他の諸権利は無意味である。民主主義社会に認められる諸権利に何らかの制限をおく必要がある場合、その制限は、結果として人間の権利全体の構造がそれによって補強されるかどうかという観点から、それが合理的であるかどうかを考えなければならない。

## 4：批判的知性に基づく倫理観

反宗教的ヒューマニズムの倫理観は、聖書至上主義に立つ根本主義者たちの批判に晒されてきた。我々反宗教的ヒューマニストも、人間生活に倫理が欠かせないことは十分に認識している。言うま

でもなく、倫理学は宗教が神的権威に基づいて彼らの道徳体系を喧伝する遙か以前に、人間認識の一つの学問として発展していたものである。倫理学の分野には、その発展に貢献した有数の思想家たちがいる。古くはソクラテス、デモクリトス、アリストテレス、エピクロス、エピクテトスからスピノザ、エラスムス、ヒューム、ヴォルテール、カント、ベンサム、ミル、G.E. ムーア、バートランド・ラッセル、ジョン・デューイその他の思想家たちである。倫理学には哲学上に確固とした伝統がある。倫理学が独自の自立した学問分野であることは、そのことによって明らかである。倫理的判断は啓示宗教とは無関係に形成できるし、人間自身が実生活で理性や知恵を涵養し、その涵養した理性を活用して徳を持った優れた生活を達成することもできる。更に言えば、哲学者たちは、社会正義と他人に対する個人の義務および責任とに何が必要かを正しく認識する重要性を強く主張してきた。従って、我々反宗教主義者は、道徳が宗教的信念から引き出されること、あるいは何らかの宗教教義を支持しない人々が不道徳であるとする考え方を拒否する。反宗教的ヒューマニストたちにとって、倫理的行為は批判的理性によって判断されるもの、あるいは判断されるべきものであって、その目標は、人間の行動様式に関する理解にもとづいて、人生での諸々の選択を自ら決定できるような、自立的で責任感のある個人を育成することにある。神を根拠にしない道徳だからと言って、反社会的、主観的、好色的である必要はないし、道徳上の規範がそれによって破壊されるようなことにもならない。異なった生活スタイルや社会通念は容認されて当然だと考えているが、だからといって、それらが全く批判に晒されないでいいと思っているわけではない。また任意の一つの教会が、他の人々に、道徳上の善や罪、性行為、結婚、離婚、産児制限、墮胎に関する見方を強要したり、それらを合法化したりすべきであるとは思っていない。反宗教的なヒューマニストとして、我々は今現在の幸福の重要性を何より価値のあることだと信じている。我々は絶対論者の道徳観には反対するが、客観的な基準は見い出されると思っているし、倫理的価値や原理も慎重に検討するなかで、必ず発見できるものと考えている。反宗教的ヒューマニストたちの倫理観によれば、人類は、宗教上の戒律や聖職者の教導を受けなくても、独力で意義のある健全な生活ができるし、同胞の人類のために奉仕することもできると言われる。反宗教主義者やヒューマニストたちの中には、自らの生活や著作において道徳的原理を示した者が数多く存在してきた。プロタゴラス、ルクレティウス、エピクロス、スピノザ、ヒューム、トーマス・ペイン、デイドロ、マーク・トゥエイン、ジョージ・エリオット、ジョン・スチアート・ミル、アーネスト・リーマン、クラレンス・ダロウ、ロバート・インガソル、ギルバート・マーレイ、アルバート・スヴァイツァー、アルバート・アインシュタイン、マックス・ボルン、マーガレット・サンガー、バートランド・ラッセルなどである。

## 5：道徳教育

道徳の涵養は、少年時代と青年時代とにおいて陶冶されるべきものだと信じる。いかなる特定の宗派も、自分たちが持っているものだけに重要な価値があると主張すべきではない。重要だからこそこれらの価値は、公教育が適切に扱う必要がある。従って、我々は、学校での道徳教育によって道徳上の美德や知性、人格の形成が涵養されることに賛成だし、可能ならどこでも道徳的感性の育成が計られ、自由選択の幅が増加されること、またそれをすればどうなるかという結果に対する理解力が高められることを切に望んでいる。乳児に洗礼をしたり、思春期の少年に堅信式を施したり、

あるいは承諾年齢以前の青年たちに宗教信条を強要したりするのは、道徳的なことではない。子供たちが宗教上の道徳的実践の歴史について学ぶのは良いことだとしても、自分でそれらの利点を勘案できるほどに精神が熟す以前に、ある種の信仰心が植え付けられるべきではない。反宗教的ヒューマニズムは、特別な倫理というようなものではなく、合理的な道徳原理を説明し発見する一つの方法なのである。

## 6：宗教に対する懐疑主義

我々反宗教的ヒューマニストは、一般に因果関係によって説明できないような超自然的な主張には懐疑的である。その経験によって人生が変えられたり、人生に意味が与えたりするような宗教的経験の重要性は、我々も認める。しかしそのような経験が超自然的なものに関わるという主張には反対である。我々は、伝統的な神や神性の見方に懐疑的である。宗教を象徴的なものとか神話的なものとする宗教解釈は、しばしば一部の知識人には合理的な説明として有効に働くが、大方の人間にはただ神学上の混乱の中で方向を見失わせる結果になる場合が多い。我々は、この宇宙が科学的な探求によってもっとも効果的に理解できるような、自然の力のダイナミックに躍動する舞台だと捉えている。我々には常に、自然界に新たな可能性と新たな現象とが見い出される可能性が開かれている。しかしながら、神存在の伝統的な観点は無意味であるか、つまりまだ真として証明されていないものであるか、あるいは暴君的に不当に力を行行使するものかのいずれかだと考えている。反宗教的ヒューマニストたちは、不可知論者、無神論者、合理主義者あるいは懐疑主義者であると言われるかもしれないが、そのような立場の人間たちは、神の何らかの目的が宇宙に存在するという主張には不十分な証拠しかないと考え、神が奇跡を起こして歴史に介入するとか、一部の選ばれた人々だけに自らを顕示されるとか、神は罪人を救われるというような考え方を拒否する。彼らは、男も女も自由であること、そして自分たちの運命に責任があること、救いのために何らかの超越的な存在を期待できないと信じている。イエスの神聖、モーゼやモハメッドの召命、またその後の様々な宗派や教派の預言者や聖者も信じない。またたとえそれらが文学としては重要な価値があるにせよ、旧約聖書や新約聖書、コーランあるいは他のいわゆる宗教的文書の字義通りの解釈を真だとは認めない。宗教は広く認められる社会現象であって、宗教的神話は人類の歴史に昔から存続してきたものである。人類は、確かに宗教が精神を高揚させるだけでなく、慰めの源泉でもあることを見出ししてきたが、彼らの神学上の主張が真実だとは思えない。宗教は、文明化の発展に積極的な貢献してきただけでなく否定的な働きかけもしてきた。宗教は病院を建設し学校を造る援助の手を差し伸べ、愛と慈善の精神を鼓舞することに最善の努力を払ってきてはいるが、その多くは、彼らの信条や信仰を受け入れなかった人々には不寛容な態度を示し、人類に苦痛を与えることもしばしばであった。一部の宗教は、偏狭的かつ残忍なものであったために、人類の視野を狭め、願望を制限してきただけでなく、宗教戦争や暴動まで引き起こしてきた。宗教は、死後の生を約束することで、親族を失った人々や瀕死の状態にある人々に慰めを与えてきたのは確かだが、同時に病的な恐怖心をも与えてきた。我々はまだ、生まれる前に、あるいは死んだ後に「魂」が独立して存在するという確たる証拠を見出してはいない。以上のことから、我々は、倫理的な生活は不死性やキリストの受肉というような幻想を抱かなくてもできると結論づけざるをえない。人類の生活条件を改善し、意味のある生産的な人生を送る上に不可欠なことは、自己信頼感を高揚することである。

## 7：理 性

宗教を信奉する人々は、悲しむべきことに、理性と科学とを目の敵にしている。我々は、知識を促進する場合や、真理だという主張を吟味する場合には、論理学と証拠を利用して、合理的な探求を試みることに全力を尽くしている。人間には過ちが付き物である以上、すべての原理がいつでも修正できる道を残しておく必要がある。原理が生み出される仕方や内容を含めて、絶えずそれらには訂正が必要になりうると考えておくことが大切である。人類のあらゆる問題は理性と科学を利用すればたやすく解決されると素朴に信じ込むのは危険だが、それらが人類の知識に大きな貢献をなせること、また人類に恩恵を持たせられることは間違いないものと信じている。それらほど、人類の知性を洗練させるものは他にはないからである。

## 8：科学と科学技術

科学的方法は、たとえそれが不完全なものであっても、世界を理解するもっとも信頼のできる方法であると信じている。だからこそ、宇宙を理解するために、自然科学、生物学、社会科学、行動科学を研究し、その中で人間がどのような立場にあるかを考えているのである。現代の天文学と物理学は、宇宙に関する心躍る新たな局面を切り開き、人類に宇宙空間を移動して宇宙を探求することを可能にさせた。生物学、社会科学、行動科学によって、人間の行動様式が深く理解されるようになった。だから原則的に、そうすることが何にもまして重要だと判断されない限り、科学研究を監視したり、制限したりするようないかなる試みにも反対する。もっとも科学技術が不適切に乱用される危険性も認識しているし、人類の生態系に害を及ぼす可能性のあるものには断固反対するが、何の思慮もなく科学技術や科学の発展を制限することにはどこまでも抵抗する。科学や科学技術（とりわけ基礎研究や応用研究）が人類にもたらす偉大な恩恵を大いに評価する一方で、科学や科学技術が芸術、音楽、文学の文化的側面の開発とも均衡を保つ工夫にも目を配らねばならない。

## 9：進 化

今日、進化論は再び宗教上の根本主義者たちによって激しい攻撃に晒されている。進化論が最終的な理論化に成功したとは言い切れないし、無謬の科学理論があるとも断言できないが、少なくとも様々の科学上の発見物を見る限り、進化論が非常に優れた理論であることは間違いない。進化の仕組みについては、科学者たちの間でも無視できない相違はあるものの、種の進化については否定できない証拠によって強く支持されている。（特にアメリカの）根本主義者たちが、科学教育に強引に割り込み、自分たちの創造科学理論を学生に押しつけるだけでなく、生物の教科書にもそれを入れるように強要するなどには愚考の極みである。これはまさに、学問の自由と教育課程の一貫性との両面において深刻な脅威を与えるものである。確かに創造主義者にも自分たちの意見を述べる自由があつて当然だし、宗教に関する教育課程の中でその種の創造理論を吟味する価値までも否定する気はない。しかし宗教上の信念を科学上の真理として誤魔化すことは欺瞞であり、科学教育のカリキュラムまで汚染することにもなりかねない。かりにそれが成功すれば、創造主義者たちは科学そのものの信頼性まで失わせるような深刻な事態に直面することになるだろう。

## 10：教育

教育は、他の人間や動物への共感を育んだり、自由で民主的な社会を築く上に不可欠な方法であるべきだと考えている。教育の目的は、知識の伝達、職業訓練、職業選択に関わる指導、民主社会での市民としての役割認識、および道徳的成長の促進など様々である。その中であってとりわけ重要な目的は、個人にも社会にも、批判的知性の能力を涵養することにある。遺憾ながら、現代の学校は公の情報や教育を行う主要な機関がますますマスメディア化しつつある現状である。電子メディアによって比較にならないほど文化を豊かに享受でき、学習できる機会も更に増してきているとは言え、誤った目的に向かって進む危険性も深刻になってきた。全体主義社会では、メディアが喧伝と洗脳的手段として利用されている。民主主義の社会では、テレビ、ラジオ、映画、量産される図書が一般大衆相手に垂れ流されて、感性の麻痺した不毛地帯と化している。差し迫って必要なことは、物事を選択する際の個人の好みや評価の基準を高めることである。我々反宗教主義者が問題にしたいのは、(アメリカに顕著に見られるように)メディアが宗教的偏向を不当に支持している事実である。説教者や信仰治療の祈祷師、宗教宣伝家たちの思想が野放図に広がり、反宗教主義者の観点が公平に聴き入れられない状況にある。これはひとえにテレビのディレクターやプロデューサーたちの責任であって、報道の偏りから生じたその不公平さを正し、番組を再編成する必要がある。実際、民主的な反宗教主義者の価値を認める人々は例外なく、反宗教的な観点が人類の生存にとって不可欠な思想であって、それを長期的な展望にたつて公教育や啓蒙に生かす必要に迫られていると考えている。

## 結 論

民主的かつ反宗教的なヒューマニズムは、人類の文明には不可欠な、決して放棄できない大切な思想である。合理的な人間なら、誰しもこの思想が必ず人類の幸福に多大の貢献をなすものと認めるであろう。それにもかかわらず、周囲には、常に時計を逆向きに進ませようと、反科学主義、反自由主義、反ヒューマニズムを標榜して、最後の審判の惨事を予言する者がいる。反宗教的ヒューマニズムの観点は、逆に、過去を振り返って絶望するのではなく、前向きに希望を持って前進しようとする思想である。我々は、理性や自由、個人や集団に与えられるチャンス、世界全体に広がる民主主義という理想の元にひたすら専心しようと考えている。人類が過去において遭遇した問題も、また将来において出くわす問題も、明らかに複雑かつ困難なことは間違いない。しかしそれでも、もしそれが克服できる問題なら、臨機応変に勇気を持って臨めば解決できると信じている。反宗教的ヒューマニズムは、神の導きよりは人間の知性に信頼を置く。我々は、イエスによる贖いや地獄への転落、魂の再生などの理論には懐疑的であり、人間の置かれた状態を現実的に処理しようと思っている。人間は、自らの運命に責任を持たなければならない。我々は、理性を使えば、寛容と妥協、交渉による解決という原理に基づいて、人間や他の生き物に更に共感を抱けるような世界が生み出せるものと信じている。

知性には謙虚さが必要だし、批判を受ければ信念を快く改めることも必要である。コンセンサスが得られるのはこのような方法によってである。愛情や悲しみ憎しみの感情を持つことは大切だが、幻想から逃れるために向こう見ずに救済の万能薬に頼る必要はないし、絶望して激情や暴力に走る

必要もない。憎しみを育むような各宗派の不寛容な信条が助長されることには反対である。事実を包み隠すような反啓蒙主義や不合理な蒙昧主義が瀰漫するような世界では、この世俗の社会の理想が失われないことが何より寛容である。

反宗教的ヒューマニズム宣言の草稿は、Free Inquiryの編集者ポール・クルツが認めた。

この宣言は次の方々によって支持されている。

(この宣言を支持する人々が、一々の主張のすべてに同意されているわけではないが、おおよその趣旨には賛同しているし、主義主張を明確に述べそれを実行することの大切さを信じている点では同じである。我々は善意を持ったすべての人々が、男性も女性も我々の意見に賛意を表され、自由な探求と反宗教的ヒューマニズムの主張に理解を示されることを希望したい。これらの宣言の価値が衰微することにもなれば、この惑星の文明の将来は陰鬱なものになるだろう)。

以下省略

(訳者注：以下にその名が記されているのは、例えばアシモフ、クワイン、ネイゲル、フック等錚々たる思想家達である。)